

日本学研究

1

北京日本学研究中心

1991年

日 本 学 研 究

1

北 京 日 本 学 研 究 中 心 编

科 学 技 术 文 献 出 版 社

1991年

(京)新登字130号

日本学研究

北京日本学研究中心 编

科学技术文献出版社出版发行

(北京复兴路15号 邮政编码100038)

北京广播学院印刷厂印刷

*

787×1092毫米 16开本 16印张 420千字

1991年12月第1版 1991年12月第1次印刷

印数: 1—3000册

ISBN 7-5023-1651-5/Z·272

定价: 19.00元

261

题词：

发扬各自的特长，
共同为建立中国的
日本学作出贡献

张香山

一九九〇年十一月

（中日21世纪委员会中方首席委员）

题词：

庆祝日本学研完创刊，希望
加深对友好邻邦的了解，传
播研究成果，培养新秀
人才，做出优异成绩！

周一良

一九九一年二月

（北京大学教授、中华日本学会顾问）

目 次

題詞	張香山 (i)
題詞	周一良 (ii)
創刊のことば	鹿取泰衛 (1)
創刊詞	王福祥 (2)
お祝いのことば	源了圓 (3)
創刊にあたって	李 徳・戸川芳郎 (4)
日本天皇制的歴史特徴	万 峰 (6)
日本近代中国学形成的歴史	嚴紹璽 (15)
試論日本人的集團觀念和歸屬意識	李書成 (31)
戦前日本農村工業化研究	周維宏 (41)
中国和日本社会組織特徵異同点初探	李国慶 (60)
試析《法顯伝》中印度的龍——中日仏誕表現中の龍の原型	漆 紅 (68)
一人の世界——万人の世界	李 芒 (76)
康有為『日本変政考』小考—制度局開設をめぐって	村田雄二郎 (87)
初級の文型指導について	山下紀久枝 (102)
形容詞の活用について	徐一平 (113)
中世紀行文学と歌枕	羌国華 (127)
質問文における「は」と「が」の相違	于日平 (144)
近代中国における吉田松陰像	郭連友 (165)
中国語と日本語におけるアクセントの対照音声学的研究	譙 燕 (176)
我国日語語法研究的回顧	劉耀武 (203)
中国的日本史研究	王振鎖 (209)
日本經濟史領域の一部力作	
——簡評孫承《日本資本主義国内市場的形成》一書	蘇 生 (226)
記録：北京日本学研究センター	編集委員会 (229)
英文目次	(260)
『日本学研究』について（投稿規定）	編集委員会 (封三)

創刊のことば

北京日本学研究センターは、中国国家教育委員会と国際交流基金との共同事業として1985年9月に開設されました。以来、日本学専攻の大学院修士課程と大学等の日本語教師のための日本語研修コースを有する総合的教育・研究機関として、中国における日本語・日本研究や日中交流に携わる人材の育成に積極的に努めて参りました。

今般、同センター関係者の長年の念願であった『日本学研究』が創刊される運びとなり、同センターの修了生、客員教授・客員研究員を始め、広く日中両国の日本語・日本研究に携わる方々の研究成果を発表できる場が設けられたことは、誠に意義深くまた喜ばしいことと存じます。本誌が同センターの紀要として、中国における日本語・日本研究並びに日中文化の比較研究の一層の発展に寄与し、また日中両国に跨がる研究者間のネットワークを更に大きく広げてゆくことを強く期待する次第であります。

最後になりましたが、『日本学研究』の創刊にあたり、日頃より北京日本学研究センターの運営に多大なるご尽力をいただいている北京外国語学院長王福祥先生をはじめ、北京日本学研究センター主任李徳先生、日本側の歴代の主任教授である林四郎、尾上兼英、戸川芳郎、佐藤保各先生、並びに本誌の編集作業に専心携わってこられた中国側・日本側の関係者各位に対し、この場をお借りして改めて厚く御礼申し上げ、私のご挨拶と致します。

1991年6月

国際交流基金

理事長 鹿取 泰衛

创刊词

北京日本学研究中心创办《日本学研究》，是一项很有意义的工作，我表示衷心的祝贺。

北京日本学研究中心，作为中日两国之间的友好合作事业，自创建以来，已渡过了五个春秋，培养了数百名日语教师和从事日本语言、文学、文化、社会方面研究的专门人才。如果再加上全国各地从事日本学研究的专家学者，可以说我国已经形成了一支很有实力的研究队伍。北京日本学研究中心的资料部藏书极为丰富，它不仅为中心的教学、科研服务，也面向全国，为所有从事日本问题研究的专家学者服务。我觉得，创办《日本学研究》的人才和物质基础是很雄厚的。

北京日本学研究中心，不仅是一个教学中心、资料中心，也应该是一个研究中心。中日两国是一衣带水的近邻，两国人民友好交往的历史源远流长。开展日本学研究，具有十分重要的意义。因为只有加强研究，才能增进了解，只有加深了解，才能相互学习取长补短，共同发展。创办《日本学研究》定会进一步推动我国的日本学教学和研究工作。《日本学研究》是一块学术园地。我热切希望大家齐心协力，辛勤浇灌，在这块沃土上定会百花盛开。

创办《日本学研究》得到了中国国家教委和日本国际交流基金的指导和大力支持，中日双方的主任、主任教授和编辑人员做了大量的工作，我向他们表示诚挚的敬意！

北京外国语学院院长 王福祥

お祝いのことば

源 了 圓

(日本国際交流基金北京日本学研究センター協力委員会委員長)

北京日本学研究センターから戸川先生、村田先生の御尽力で、いよいよ『日本学研究』が刊行されることになった。長年の念願が叶ってよろこびに堪えない。創立当時からこのような機関誌が欲しい、というのは私どもの心からの願いで、それについて初代の日本側のセンターの代表として創立当時、非常な苦心をされた林四郎先生と、このことについて熱っぽく語り合っていたことを思い出す。戸川先生も赴任当時からこのような機関誌の創刊を熱望しておられた。今ここに創刊号が生まれることに成って、事成るには時間の成熟が必要だということをつくづくと感ずる。歴代の両国の主任、センターで指導に当たられた両国の先生方、ないしは日本で指導に当たられた先生方の御努力、そして学生・卒業生の倦むことを知らない研鑽、それらが相寄り、ここに両先生の御尽力を核としてこの『日本学研究』が成ったのである。

この『日本学研究』の創刊によって、北京日本学研究センターは、文字通り日本学の研究センターとなる可能性をもった。北京日本学研究センターはたんなる教育機関にすぎない、それが研究センターと名乗るのはおこがましい——私たちは時々中国の友人たちからこういう批評を聞いて残念だった。しかしセンターがまだ充分の実力をもたなかったことも事実だった。今この『日本学研究』が創刊され、そしてそれが継続され、積み重ねられて行く過程において、北京日本学研究センターは、すぐれた研究にしっかりと基礎を置いた教育機関としての内実を具えていくであろう。

私がこの『日本学研究』の編集の基本方針において最も共感するのは、その執筆者をセンターになんらかの関係をもつ人だけでなく、外部にも開放するという方針をとったことである。センターで教えた先生方はもちろんのこと、卒業生の諸君がわれわれをアッと言わせる素晴らしい論文を毎号書く、そしてそれに共鳴されて中国全土のすぐれた日本研究者の方々が寄稿して下さる——そんなことを想像しただけでも楽しくなる。

私の想像がやがて現実のものとなることを願って、お祝いのことばといたします。

創刊にあたって

李 徳

(北京日本学研究センター主任)

戸川芳郎

(北京日本学研究センター主任教授)

このたび、北京日本学研究センターから『日本学研究』が創刊される。慶賀する気持ちでいっぱいである。

そもそも現在、日本語の表記は、漢字かな混り文をもって正書法としている。日本語 Japanese language の単語は、和語（わご）と漢語（かngo）とから成っていることによる。

漢語は、漢字語つまり、もと汉语 Chinese language に由来することばで日本語のなかに借用されたもの、または日本語に当てた漢字を音讀したことばである。

しかるに従来、日本語学のうえでは、和語つまり、日本の本来のことばが、移入された漢語に對比し純乎とした國語として偏重され、漢字語（漢語）やそれによって表記される文・文章に対する研究は、十分にゆきとでいた状況とはいえない憾みがあった。

そしてさらに、日本文学研究において、漢字語で書寫された漢文については、「國文學」の埒外におかれ、その研究體制においても日本文學科のなかに「漢文學」を設けられることは稀であった。

これには、明治このかた、近代アカデミズムの成立と日本ナショナリズムの形成とのからみあいがあり、比較文學・文化の視點が意圖的に導入された戦後期にあっても、この趨勢——日本文學から漢文學を敬遠する傾向——は變わらなかった。

その状況は、かつて國語・國文學と對稱された漢語・漢文學の、その教育・研究を分擔していた「漢文」科が、戦後に至って學校教育上、衰頹の一途をたどり、それにとって代わって中國文學科が擡頭する事態になったことにより、一層顯著となった。

このことは、近代史上、戦前日本の中國研究のあり方への嚴肅な反省をともなあって、「漢學・支那學」の姿勢が問われつつ、東アジア文化圏の政治的巨變に併行して、外國文學・文化研究として大きく轉回していったあとをも示すものであった。

外國文學・文化を研究する「中國文學・哲學」科は、かくて變貌を遂げ、學際化と國際化に路を開きつつある反面、「漢文學」科の消滅していったあとの日本文學・文化の學術研究は、その重要な一パートであるべき、漢語學・漢文學および漢字文獻

を主たる資料とする日本思想・文化の研究を、ながく不遇なマージナルな分野として貧困の状態においてきた、といって過言ではない。

現今、先人たちの尋常ならざる努力によって、それらの分野にも卓越した業績が積みかさねられつつあるが、しかしながら今や、この研究・教育分野の學術體制上の對應が、あまりにも遅きに失していることを痛感せざるを得ない事態にたち至っている。

すなわち日本語學・文學科には、かならず漢語學・漢文學の科目を設けること。そして「日本文化」「日本思想」を、東アジア文化のとりわけ無視されつづけてきた朝鮮語・文學や朝鮮文化・思想とともに、その一環として新たに専攻學科・科目として設置し、日本史・倫理學・政治思想史・中國思想の分野に伍して、確固として獨立させなければならない。

かかる時期に際會して、北京日本學研究センターは、時代にさきがけ日本國內の状況を先どりして、「日本語學・日本文學・日本社會・日本文化」の四専修課程を擁する獨立した日本學専攻の修士課程の、研究・教育機關として發足した。

そこでは中國全土から招かれた有能な學生のために、日本研究の最先端の講授と研究指導がなされており、同時に年を逐って充實する圖書資料館を附設し、文字どおり全中國における斯學の中心となりつつある。ここに、第一回の研究成果が公刊される。まことに意義ある壯舉といわなければならない。おめでとうございます。

1991年3月31日

日本天皇制的历史特征

万 峰

(中国社会科学院研究员 中国日本史学会会长)

日本昭和天皇于1989年1月7日逝世，2月24日举行所谓“大丧典礼”（葬礼），从而完成了结束整个昭和史的最后一道程序。老天皇去世后立即继位的平成天皇，于1990年11月12日举行即位大典。近年来，围绕昭和天皇的患病、逝世和平成天皇的登极，在日本掀起了一股“天皇热”。如果不单纯以学术界的天皇制论争计，那么这次可算是战后第二次声势较大的“天皇热”。战后初期大约于四十年代末五十年代初，由于日本战败无条件投降，破除了不准议论天皇的最大禁忌，曾经掀起过“天皇热”。那时，在政治上是关于保留与废除天皇制、天皇退位并被追究战争责任与天皇留位并免究其战争责任的大辩论、大抗争；在学术上则是继承和发展本世纪三十年代开始的所谓“资本主义论争”（其中有关明治维新性质的争论涉及近代天皇制问题），深入地展开了天皇制“绝对主义君主制”说与“资产阶级君主制”说，以及有关“天皇制法西斯主义论”的大论争。

与战后初期不同，八十年代末期出现的这次“天皇热”，其特点是统治当局和舆论界、学术界的部分势力竭力美化昭和天皇为“和平主义的明君圣主”，百般为他开脱战争责任。在这股思潮下，出现了否认昭和史（前期）的阴暗面，即：对内实行军国主义法西斯统治、对外长期持续地实行侵略扩张和战争的逆流。当然，反对美化昭和天皇，坚决追究其战争责任，以至要求趁此天皇换代之际废除天皇制的呼声，也不示弱。同时，在这次“天皇热”中，还出版了不少研究天皇制的学术论文和专著。这有助于进一步加深对天皇制的研究。总之，从战前到战后，特别是战后出现的几次“天皇制论争”和“天皇热”，无可辩驳地证明，天皇制特别是近现代天皇制，是日本史特别是日本近现代史研究的一个重大课题。近年来，在我国的日本研究界也不断出现日本天皇制研究的成果，这是可喜的现象。本文拟就日本天皇制的历史特征作一些探讨，以期唤起同道们进一步加深天皇制研究的兴趣。

（一）

在谈论天皇制的历史特征之前，有必要说明一点。这就是：天皇制是日本式的君主制，正如沙皇制是俄国式的君主制一样。天皇制有其政治、学术和历史的内涵，固不待言。再者，“天皇”这一称号虽古已有之，然而作为政治和学术用语的“天皇制”，却产生于现代，是本世纪三十年代第一次由日本共产党《三二年纲领》提出来的。还须指出，在历史上日本天皇制经历了古代、近代和现代三大时期。古代天皇制始于公元七世纪；近代天皇制始于十九世纪六十年代后期；现代天皇制始于二十世纪四十年代中期。本文所谈的日本天皇制的历史特征，是贯彻于其发展演化的历史中帶有一定规律性的东西。

天皇制的历史特征，首先可以举出的是：其皇统绵亘千余载，并且一直是由天皇家族承续，尽管并非全由嫡系血亲相传。这在世界君主制史上是罕见的。据说，仅逊于埃塞俄比亚的“皇统连绵三千年”。①

那么，天皇制的这一历史特征是如何形成的？在回答这个问题之前，有必要简单地回顾一下天皇和天皇制产生和发展的历史。“天皇”这一称号，本非日本土著，而是源出中国。中国最早有天帝的观念，“天皇”则是天子和皇帝二者兼而有之的，拥有最高权力者的称号。在中国称皇帝为“天皇”的，只有唐高宗，时间是在公元674年。但这只是一时的称号而已，并未流传开来。“天皇”称号，倒是在日本扎了根，而且实际上要比唐高宗还早一些。日本古称“倭”，而倭国的最高统治者称天皇，则是在日本进入阶级社会产生古代国家以后的事情。因为日本古代没有文字，汉字传入大约在公元四、五世纪，而日本能用汉字记事，大约在六世纪。因此，只能凭借中国有关的史籍记载来推断古代日本的情况。日本古代国家是以由村社首长统治的小部落开始登上历史舞台的。据中国《汉书地理志·燕地》记载推断，大约公元前一世纪下半叶日本出现了成百个这样的小部落。这时，日本社会已开始从原始公社制社会向第一个阶级社会即奴隶制社会过渡。据《后汉书》和《三国志》的《魏志·倭人传》记载推断，公元二世纪末三世纪初出现的邪马台国这一部落联盟的盟主，可视为日本奴隶制社会初期粗具规模的国家。但是，不论是部落还是部落联盟盟主邪马台国的最高统治者，均称“王”，而且不能算是天皇家的祖先。

天皇家的祖先确立其国家最高统治者地位，则是在日本史上称为“大和朝廷”的时期，而且并非一开始就称“天皇”的。大和朝廷位于畿内的大和地方。它从大约四世纪（一说三世纪）起至七世纪中叶止，前后长达三、四百年之久。大和朝廷的最高统治者，起初多称“王”，到了五世纪称“大王”，与一般的“王”区别开来。到了大和朝廷的后期则开始称“天皇”。据中国《隋书》记载，七世纪初的608年推古朝派出的第三次遣隋使所携国书中有“东天皇敬白西皇帝”一句，倭王对外使用“天皇”作为自己的称号。另外，在这前一年（607）推古朝派出的遣隋使所携国书中有“日出处天子致书日没处天子，无恙”②一句，曾惹恼隋炀帝，酿成有名的“国书事件”。据《善邻国宝记》引用《经籍后传记》，该句应为“日出处天皇致书日没处天子”③，日本学者木宫泰彦认为这一记载可信，国书原文可能是“天皇”，而被《隋书》编者改成“天子”了。④还有日本奈良现存的法隆寺金堂上安置的药师如来佛像的光背铭文载有“大王天皇”和“治天下大王天皇”等字样。⑤根据上述史料推断，可以认为倭王称天皇的时期，大约始于六世纪末七世纪初，即大和朝廷的推古女帝在位期间。担任摄政的圣德太子，于七世纪初实行“冠位制”，制定《十七条宪法》，推行改革，初步确定了统一的中央集权政治的原则。这一推古朝改革，可视为走向古代天皇制的起点。而古代天皇制的正式确立，则是在七世纪中叶645年大化改新以后。大化改新结束了大和朝廷的历史，开辟了一个以天皇为君主的古代专制君主制确立的新时期。古代天皇制国家，不仅仿唐律令制建立起以天皇为最高统治者的、一整套从中央到地方的统治机构和制度，而且仿中国皇帝惯例开始制定年号。从此，日本天皇代代有了年号。从上述的历史情况来看，天皇家的历史迄今至多1600年，而天皇家成为最高统治者的时期除了初期的倭王制不计外，天皇制的历史迄今至多1400年。本文所讲的天皇制的第一个历史特征，在严格意义上就贯穿于这不足1400年的历史之中。

(二)

说到天皇制的第一个历史特征形成的根本原因，似可举出这样几条。首先，在天皇家的祖先取得统治地位时，即日本刚从原始公社制社会过渡到奴隶制社会时，并未经过社会革命，而是凭借输入、移植大陆先进的中国文化，经过自上而下的渐进的改革实现这一过渡的。天皇家的祖先，从村社首长变成倭王、大王后，仍以氏族族长的面貌来掩盖其作为最大奴隶主的最高统治者实质。列宁说：“国家是阶级统治的机关，是一个阶级压迫另一个阶级的机关。”⑥日本的奴隶制国家，当然也不能例外。但是，由于日本的特殊历史条件，由原始公社制社会过渡到奴隶制社会时，氏族制的残余与新的社会关系体制融合，从倭王到天皇都利用了这种关系，以一氏（族）之长的面貌出现，而被统治者则成为以天皇氏（族）为首的“大家族”之一员。后来，又从儒家学说中取得理论依据，逐渐形成了所谓“家族国家”观念（天皇与臣民有如家长与家族成员的关系），用以抹煞天皇制的阶级统治实质。这种家族国家观念被鼓吹很久，一直到第二次世界大战时期也还有这种蛊惑宣传，所谓“八纮一字”这一日本军国主义法西斯称霸世界的反动口号，也是从这里扩大演化出来的。总之，从天皇家的祖先取得统治地位起，经历代天皇及其侧近的统治阶级大力宣扬家族国家观念，是天皇家承续皇统历千余载的一个根本原因。

第二、是长期来天皇神化、皇权神授和天皇神国统治的一套神话，不断巩固和维系天皇的传统权威，麻醉了日本人民群众。这种神话可以追溯到更久远的上古时期，但是其集大成者始于公元八世纪成书的两部史籍《古事记》和《日本书纪》（通常以《记》《纪》并称）。《记》《纪》根据已流传的神话和神道的传说，为了巩固天皇制统治的需要，把日本的历史描绘成开天辟地以来就是神国的历史，而开天辟地肇始日本者又是天皇的祖神。天皇是天照大神的子孙，即天孙。继神代之后天孙降临统治日本列岛。第一代天皇称“神武天皇”。《记》《纪》就是从他开始编排天皇家的历史记年和谱系。神武天皇，实无其人。编造这种谱系的目的，无非是鼓吹天皇是从日本肇始就已有之的所谓“万世一系”的神话。从前述简要的历史情况便可知道，这样的“万世一系”的天皇制是根本不存在也不可能存在的。然而，直到今天天皇家还在遵循这一谱系，比如昭和天皇排为124代，平成天皇125代。说来，“万世一系”的说法，并非日本人发明，而是从中国传去的。秦始皇当年就曾有过“万世一系”的皇帝梦，但不幸仅以二世而终。日本所说“万世一系”，重在神代以来的“神国万世一系”，就更加玄乎其玄了。不错，在岛国日本的特殊条件下，天皇家的皇统比较久是历史事实。但是，由于人类社会发展的规律起作用，正如世界史上不可能有与人类诞生俱来的君主制一样，也不可能有永远伴随人类社会发展的君主制。从欧洲到亚洲，君主制的演变以至消亡的国家愈益增多，这已是历史的大趋势。日本天皇制又怎能存万世而不泯呢？

第三、日本没有“易姓革命”。日本天皇制从中国帝制学去了不少东西，但是日本却没有学习中国的“易姓革命”。在中国是“王侯将相宁有种乎？”“君不君、臣不臣”，成了改朝换代的合理主义的思想依据。因而“易姓革命”成了不可动摇的传统。在中国帝制史上不断改换皇帝的姓氏，绝无一个皇帝家族从古到今一直保持皇统的。日本之所以无“易姓革命”传统，除前述家族国家观念支配和伴随神化的天皇传统权威起作用外，还有在忠孝问题上忠优于孝、忠君尊皇思想压倒一切，也杜绝了“易姓革

命”。因此，在日本历史上即使有人实际上夺了天皇的大权，但却不去推翻天皇而自立天皇或根本取消天皇制。这样的事是屡见不鲜的。比如，在古代天皇制时期，先是平安时代有贵族藤原氏专权。自藤原道长以来以“摄（政）关（白）政治”闻名的藤原氏一门，以代理天皇地位的摄政、关白之要职，飞扬跋扈，称霸一时，但并没有篡位当天皇。后来在所谓“武家政治”时期，政权的中心转移，但天皇还继续存在。

当日本进入中世纪封建社会后，封建武士的首领人物源赖朝，继1185年在镰仓开府后，1192年任征夷大将军，正式创立镰仓幕府，在全国开创幕府将军制统治。从此，开始了日本史上大约700年间的“武家政治”。在此期间天皇大权旁落，天皇家变成无足轻重的小朝廷，受制于幕府。天皇制已不具有实际的统治权能。幕府将军才是真正的统治者，在这个意义上将军制可以说是一种变相的君主制。在历史上外国有称日本幕府将军为“国王”“大君”的，有时将军对外也以“大君”自诩，都是这种变相君主制的反映。而到后来，天皇家小朝廷受制于幕府的状况也愈演愈烈。在晚期封建社会的德川幕府时期达到登峰造极地步。幕府对天皇家小朝廷百般压制和刁难。在经济上，天皇家和宫廷贵族的领地合计不过十二万五千石^⑦，其中天皇家仅有三万石^⑧，与拥有四、五百万石领地（如加上分封给家臣的采邑则约为七百万石）^⑨的德川将军家相比，简直不啻霄壤之别。在政治上，德川幕府制定《公家诸法度》，天皇家及宫廷贵族从日常行动到服装、官位晋升等都必须严格按照此法令行事。幕府只准天皇规规矩矩地读书习字，不得过问政治，甚至为了防止天皇与外界诸侯接触，规定宫廷大门不得随便出入。幕府还在京都设“所司代”（官职名）专门负责监视天皇的行动。总之，天皇无政治权威可言，老百姓只知有在江户的将军，而很少知道有在京都的天皇。德川幕府末期皇宫几次遭受火灾，宫殿被焚，境况更加凄惨。当时京都曾流传一首嘲笑天皇家的诗歌：“凤凰生末世，落魄亦堪悲；雉鸡遭野火，被逐无巢归。”^⑩尤有甚者，德川将军家为了树立自己的权威和巩固自己的统治地位，竟然仿效天皇家把自己神化起来。第三代将军德川家光，修造富丽堂皇的日光东照宫，供奉德川幕府的开创者德川家康为“东照权现神”。后来幕府颁布的法令和文件，还有学者写文章常称家康为“神祖”“神君”“权现样”等等。而且天皇不得不每年派“奉币使”（官职名）去参拜德川家康。与此相反，德川将军却从不派特使者去参拜伊势神宫（供奉天皇家祖神）。^⑪

即使在德川时代天皇家小朝廷最受冷落、处境最为悲惨的年代，天皇也没有被打倒、在形式上天皇制也没有被废除。天皇家小朝廷仍继续在京都存在。曾经和天皇家一道统治日本的古代贵族的后裔即宫廷贵族们，也都世代相传居住在京都。虽然他们穷困潦倒，但仍按照各自门第等级建起各种规模不等的府邸，在天皇家宫廷四周连成一片。天皇还继续按照古代天皇制时代沿袭下来的官制和位阶等级制，授予他们官位。像摄政、关白这样位极人臣的重要宫廷官职一直没有废除过。当然，天皇的这种授官叙位的活动一定要经幕府点头，而且由于天皇大权旁落，这些宫廷官职也早已丧失实际权能。此外，天皇的年号、传位的“三种神器”，以及供奉和祭祀祖神等仪礼制度等等，也都依然如故。可见，天皇制在濒于灭亡边缘时，幕府还是把它供在那里，不去推翻它。这是为什么？这除了前述日本没有“易姓革命”等情况外，就“武家政治”而言，还有两点重要原因。这就是：一、从源赖朝起，武士首领们原本是仰赖天皇家和宫廷势力起家，念念不忘“君泽天恩”。二、自“武家政治”时代伊始幕府就一面利用天皇的传统权威为自己

打下的江山服务，一面使用排挤蚕食等策略逐步夺权，建立封建武士领主的一套统治机构。正因为这样，表面上幕府将军等幕臣的任免还要天皇批准（实际上是不能拒绝批准），以此来维护“忠君”的形象，免遭“乱臣贼子”“叛逆篡位”之攻讦。

（三）

日本天皇制的第二个历史特征在于，它经历了日本社会从古代奴隶制到现代垄断资本主义的整个阶级社会的发展进程，却能基本上保持天皇家宫廷所特有的那一套典章仪礼，以及包括“三种神器”在内标志着神授王权的社稷庙堂之传家“宝物”。恐怕这在世界君主制史上也是罕见的。

近代以前的状况不须赘述，现在看一下近代天皇确立后是如何体现这一历史特征的。近代天皇制，是日本天皇制历史上最重要的时期，是空前绝后的鼎盛期，在某种意义上也可以说是它“起死回生”的时期。我们通常所讲的天皇制如果不冠以一定的定语修饰时，则往往指的是近代天皇制。近代天皇制，是1868年明治维新的产物，其确立与这场具有划时代意义的资产阶级改革运动密不可分。如前所述，德川幕府末年天皇家小朝廷已是日薄西山、人命危浅，度日维艰。但是时逢幕末开港后的突变时局，从尊王攘夷运动兴起到倒幕维新运动的开展，以下级武士改革派及宫廷贵族改革派为一方，与以幕府及保幕派诸侯为另一方，双方为了争夺政权而展开一场争夺天皇的激烈斗争。他们都是为了控制天皇，利用天皇的传统权威来达到自己的政治目标服务。当时，天皇被人当作“玉”争来夺去。先是老天皇（孝明天皇）被幕府拉过去，与幕府站在一起搞过镇压改革派的政变。1867年1月30日老天皇去世，2月13日年仅十五周岁的幼帝（明治天皇）继位。这时倒幕维新运动蓬勃发展，胜利在望，新天皇又未成年，天皇这个“玉”稳操在改革派手里，自不在话下。1868年1月3日，领导倒幕维新运动的下级武士改革派，高举“尊皇”大旗，在皇宫内搞了一次所谓“王政复古”的政变，一举夺取天下。他们打倒幕府，要借助天皇的传统权威，而建设近代中央集权的统一国家，就不止是借助权威，更要把天皇扶上最高统治者的宝座。所以，这次政变后建立的维新政府，一开始就是以明治天皇为首的政府。及至1889年制定《大日本帝国宪法》（通称“明治宪法”），正式宣告日本近代天皇制的确立，并在法律上予以固定下来。

明治维新时提出的最大政治口号“王政复古”，意即将天皇的权力和地位恢复到和古代天皇制天皇亲自掌权时一样。当然，毕竟时代不同了，要完全重演古代天皇制是不可能的。因此，近代天皇制实际上既有“复古”的一面，也有“维新”的一面。所谓“复古”首先就是恢复了天皇的统治大权，一反“武家政治”时代大权旁落、处于虚位的状态，尔今变成了大权总揽的近代专制君主的实位。宪法还明文规定，天皇是“神圣不可侵犯”的、“万世一系”的最高统治者。这比古代天皇制还进了一步，以近代国家的大法宪法来保障天皇神化和皇权神授的政治迷信。神道成了国教，天皇成了“现人神”。其次是制定《皇室典范》，用法律将包括皇位续承、年号等等自古以来的一套皇室制度固定下来，并实行所谓宫中（皇室）与府中（政府）之别，使天皇家和宫廷成为一个“国中之国”的独立天地，不受政府和其他外界干扰。

所谓“维新”一面，比如明治天皇政府成立初期，在1885年实施近代内阁以前，虽曾仿古代天皇制采用太政官制度组织政府机构，但从一开始就废除了摄政、关白等古代

天皇制的一套官制，并逐步建立起近代文官和武官制度。再就是建立号称“华族”的近代贵族制度，取消了古代以来的公卿（宫廷贵族）制度。尤其是近代天皇制是效仿普鲁士德国君主立宪制，使天皇制披上了立宪的外衣，这不能不说是它的最大“维新”之处。

“维新”还包括建立和扩充近代式的天皇家财产。随着近代地主制的确立和近代资本主义形成和发展，近代天皇制国家成了地主和资产阶级联合专政的政权。早自明治政府成立不久，即着手给天皇家增加财产，自1882年起，明治政府又专门设立皇室财产，到1889年明治宪法制定时，天皇家拥有土地达113万町步（1町步约等于1公顷），次年更增为365万町步。^⑫天皇家拥有的银行和企业股票，1882年达860万日元。^⑬天皇成了日本银行和横滨正金银行最大的股东。这种动产以后又不断增加。可见，天皇家已成了全国最大的地主和最大的资本家。在这个意义上，可以说天皇家捞取了明治维新的最大果实。

那么，近代天皇制以后的情形如何呢？1945年日本战败，翌年即1946年在当时反法西斯盟国（实际是美国一国）占领下，废除明治宪法，颁行新的《日本国宪法》，从而确立了现代天皇制。近代天皇制也随之退出历史舞台。与近代天皇制相比，现代天皇制的最大特点在于是标榜“主权在民”的象征天皇制。按照《日本国宪法》规定，天皇丧失统治大权，只不过“是日本国的象征，是日本国民整体的象征，其地位以主权所在的日本全体国民的意志为依据”。^⑭宪法明文规定天皇“并无关于国政的权能”。^⑮天皇只能参与一些国事活动，如召开国会、解散众议院、公布举行国会议员的总选举、认证官吏的任免、认证大使公使的国书、认证大赦、复权、授予荣誉称号、认证外交文书、接见外国使节等。但是，这些国事活动要以内阁的建议和同意为先决条件，不能有天皇个人的意志。即使天皇拒绝，内阁也照样通过。因此，这些国事活动只是形式上的程序性、礼节性活动，丝毫不体现统治权能。比如，据统计，新即位的平成天皇于1989年一年里由内阁送交他过目的有关法律、政令、条约的颁布和国务大臣任免等国事活动事项的文件总计约达1200件之多。^⑯但是，他只不过是看过签名盖章而已。由于战后新宪法的颁行，神道被禁止作为国教，实行国家与宗教分离。昭和天皇也于1946年元旦发表“人间宣言”。这一切基本上结束了自古以来天皇神化和皇权神授的历史。

正如日本学者弥津正志所指出的，日本这种象征天皇制，“比比利时和英国的立宪君主制更为民主，更为确切地说，它是介于立宪君主制与共和国之间的一种政体。”^⑰应该说，从近代天皇制变革为现代天皇制，是反法西斯各国人民斗争胜利的重大成果，在一定意义上也符合自明治时代以来日本人民渴望自由民权的夙愿。而且，日本人民也为争取到这一步付出了惨重的代价。

那么，现代天皇制确立后，天皇家的那一套传统的东西有无变化？应该说，包括皇室财产在内是有不少变化的。随着新宪法的颁行，明治年代制定的《皇室典范》虽未废除，却经过修订。经过修订的《皇室典范》，简化了一些传统制度，连年号的法律根据也消除了。同时由于规定不完善，留下一些使旧东西复活的漏洞。要看到，只要天皇制还存在，自古代天皇制以来遗留下来的天皇家那一套特殊的制度、仪礼，总会在一定程度上保留下来。远的不说，单说1989年2月24日昭和天皇的“大丧典礼”（葬礼）、1990年11月12日平成天皇的即位大典和同月22～23日的“大尝祭”等都有传统的仪式。比如，举行即位大典时，在皇宫正殿庭院内有红地用各种颜色镶边的仿古万岁幡和白黄蓝紫等